

# あゆみ通信

VOL. 166

あゆみの会(真宗大谷派大阪教区第2組同朋の会推進連絡協議会) 会長 細川 克彦 広報 本持 喜康

## 親鸞のことば

### 自分で動かしたい、支配したいという気持ちから離れる

本願他力をたのみて自力を離れたる、これを「唯信」という (唯信鈔文意)

自力を差し置いて阿弥陀さまのはたらき(本願他力)を信じることは非常に難しいことです。私たちは自分で思い、自分で選び、すべて「自分」と言うことを離れることなく生き、それがごく自然に身に付いているからです。

そのような自分についてよくよく突き詰めて考えてみると、そこには「自分さえ良ければいい」思いが潜んでいるのではないのでしょうか。親鸞はそういう無自覚な自分中心主義を照らしたす阿弥陀さまの力を信じ、生活して生きなさいと説くのです。

(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)

## 第2組同朋大会にご参集を

2023年に入って、またまたコロナの感染拡大が繰り返していますが、皆さん、大丈夫ですか。

最近では、経済重視でほとんど野放し。制限もなく、かかっても軽いからと、自宅放棄?(隔離)、医者にもかかれぬし、高齢者の死亡が圧倒的に多いとか、ちぐはぐな施策に不安だらけですが、体調管理に十分ご注意ください。

さて、今年は宗祖親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要が盛大に本山で行われ、第2組からも団体参拝が予定されています。

これに先立ち、第2組では恒例の同朋大会が下記の通り予定されています。ただし、コロナ感染拡大状況によりましては、日程を変更する場合がありますのでご了承ください。特に今年は、相愛大学学長の釈徹宗先生をお迎えして、聞法中心の大会となります。



その釈先生から、次のメッセージをいただいております。

「このたび、大阪教区第2組の『同朋大会』のご縁をいただきました。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。新型コロナウイルスの問題が起こって、ちょうど3年となりました。この問題で、私たちの社会は、また私たちの意識は、どのように変化したのでしょうか。そしてそれに対して、仏教・真宗は何を語るのかと来るのでしょうか。このあたりから考えてみたいと思います。」

### 第38回第2組同朋大会

日時 3月11日(土) 14:00

会場 難波別院同朋会館講堂

内容 お勤めと法話

講題 「柔らかなところ」

講師 釈徹宗先生(相愛大学学長、浄土真宗本願寺派如来寺)

参加費 1000円(記念品有)

## 宗祖親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要



慶讃法要は、宗祖親鸞聖人のご誕生と立教開宗を慶び讃える御仏事です。

宗祖のご誕生、そして立教開宗を慶び讃えると言うことは、念仏

の教えに出会い、自らにかけられた願いに深く頷き、そしてその御恩に報いていく歩みに他なりません。

それは人として誕生した私が、念仏の教え・はたらきに出会う時、人として生まれて来たことの尊さに目覚め、生まれて生きることを真に喜ぶことの出来る者となる、まさに念仏の教えに出遇った者の「報恩の営み」なのです。

このたびの慶讃法要は、一人ひとりが自らにとっての立教開宗の意味をたずね、本願念仏の教えをいただくかけがえのない大切な「時」と「場」を賜うことであり、自らの聞法生活を問い直し、あらためて念仏申す歩みを確かめていく機縁となることを願いとするものです。

### 第2組慶讃法要参詣ツアー

日程 3月28日(火) 詳細未定  
予定 天王寺発→京都国立博物館「親鸞展」鑑賞→本山→(昼食)→御影堂で法要→境内散策→一路大阪へ

参加申込は、お手次のお寺へお願いします。50年に一度の仏事です。ふるってご参加ください。(参加助成あり)

### もんごみょうごう 聞其名号

其のお名号を通して、本願の心を聞く、つまり「南無阿弥陀仏」のいわれを聞くと言うことだと教えられました。迷い悩んでいるこの身を通して聞くと言うことです。

頭で聞くのではなく身を通して聞くのです。「我が身」迷い悩んでいるこの身を聞くのです。そこでお名号を聞かせていただいたら、初めて我執の世界が破られるのです。如来の本願力で我執を我執と知らされると自然に世界が開かれてくる。この世に生まれさせていただいた本当の意味と喜びが、身にも心にも与えられてくるのです。(藤井善隆「仏さまのお弟子になる一帰敬式を受けて始まる歩み」より)

養成講座の本山研修時に御影堂で帰敬式を受け、仏弟子として歩みだした意味を教えていただいた、大事な言葉です。(本)

## 紙上法話

大無量寿経の仏道⑬  
延塚知道先生

でも、そのザルを水の中に浸けるのが難しい。しかし、そうでなければ仏道でない。仏教にならん。浸けなあかんと分かっているのに、浸けられない。どうしてそうなるのか、それが一番難しいところや。

## 底が抜けている人

ぼくは大学院の学生の時、大学院なんて言うと少し勉強して、ちょっと頭が賢くなる。賢くなると、身体が言うことを効かんようになる。それで悩んだことがある。その時に、佐藤勝彦と言う画家に会いに行った。ちょっと変わってる。底が抜けてる。普通の人と違って、妙好人と言える人や。

その人が本に紹介されてた。そんな人で会いたくて、会いに行った。家に伺ったら、のけぞるように椅子に座ってた。普通だと、人が訪ねてきたら少しは身構えるでしょ。だけど僕が訪ねて行っても構えもしないでのんびり椅子に座ってる。ぼくは、この人は何も知らないのか、ものすごくえらいのかどっちかだと思った。何か、違うんや。

そして初めて会った時に「あんたはどっから来た」、「京都からです」、そして「あんた、なにしとるんや」「あけからすはや仏教を勉強してます」「あけからすはや暁鳥敏と言う人がおるやろ」と言う。佐藤さんは「ワシはあの人好きや」それで、僕も暁鳥敏先生を尊敬してるから、一生懸命に暁鳥先生の話をした。

そしたらすっかり気が合って、「家に泊まりにおいで」と言われる。それでお邪魔したら、子どもが5人おる。年子で皆元気元気。みんな走り回って、ものすごく楽しかった。佐藤さんは、何かフワッと抜けてる人なんやな。本当に楽

しかったです。

あんな人、居るんやね。見てるだけで分かる。頭が悪いと言う意味じゃなくて、抜けてる。「見栄さえ張らなければ、金はいらん」とか言う。朝起きて「手が動くぞ、おい、凄いやろ」「見てみい、手が動く足が動く」そんなことで喜んでる。

その頃、小学校で絵の先生をされてた。ところが授業で、生



徒に何も教えない。自分で嬉しそうに絵を描いているだけ。「先生、今日は何するの」って聞いたら、「さあ、きみら自分のことは自分で考えなさい」と言う。それで自分が絵を描いているのを子供たち見てるんやけれど、そのうち描きたいなと思った子は描き出す。

粘土したい子は、粘土して遊ぶ。遊びたい子は、遊んでる。お腹減った子は、弁当を食べてる。だけどね、描きたいときに描いて、やりたい時にやってるから、描いたものはいいものになる。

そんな子の絵を作品展に応募すれば、学校で一人しか入選しない賞に、10人ぐらい入選している。絵の指導は全然してないけれど、人間の教育をしている。

佐藤先生は絵を描きながら、生徒たちを見て回っている。「おー、おまえすごいなあ」「うわー、おまえはすばらしい」って。

それでたまに隠す生徒がいる。「おまえ、なんでかくすんだ」と怒ってる。

「おまえ、お母ちゃんとお父ちゃんから、こんな立派なもんもらって生まれて来とって、人に恥ずかしいもの無いぞ」、「世界一や、お前は」、「世界一のものもらって、生まれて来とるのに、なんで描いたもん隠すんや」って怒ってる。それは、絵の教育じゃなくて人間の教育。だから生徒たちは、ものすごく元気な

んや。

それで10人ぐらい入選してしまつて、僕に言う。「ワシは困つとるんだ。全国から先生が授業見にくるんだ」「ワシは何もしとらんのに」。それでテレビとかも取材に来る。佐藤先生は、自分は自分で勝手に絵を描いて、時々、生徒たちの間を回る。ものすごく自由に伸びやかでその身がそうなる。そやから、ものすごい自由や。

## 自分の方が変わる

ある時、こんなことがありました。アトリエに行ってみたら、真っ赤な絵を描いている。山も仏さんも字も、全部真っ赤で描いている。ぼくは、すぐ分かった。赤の絵の具しかないのや。「先生、赤しかないのですね」と言う。「そや、赤しかない、そやけど、楽しいぞ」と言って、赤で山を描いたりしている。だけど、それがいいんや。赤やけど、山に見えるんやな。



自分に合わせて外側を変えるのではなくて、どんな状況

のなかでも自分の方が変わっていけるような、こちら側がすごく自由になっている。あちら側を変えようとする自由じゃない。どんなにあちら側を変えようとしても、老病死と言う制約は絶対に超えることは出来ない。

だから今、みんな老人にならないように死なないようにしてる。お年寄りの女の人で、化粧で真っ白けにして、年取ってないようなふりして、あれは無理や。化粧しないおばちゃんの方が、よっぽど美しいわ。そのままきれいや。

臓器移植して、死なないように一生懸命してる。だけど、死ななかつた人は、誰もいません。お医者さんは、治る病気が治しません。ここに、お医者さんはいないよね。

(次号へつづく)